

○平成28年度奨励研究

「精神障害者向けグループホーム職員の

Emotional Intelligence感情知性と研修プログラムの開発」

作業療法学科 助教 水野 高昌

1. 研究目的

精神障害者の地域移行・定着を促進する上で、グループホーム（以下GH）による支援の拡充は急務であるが、世話人の離職率は高値のまま推移しており、利用者への支援サービス提供が滞ることがある。要因の一つに、利用者の感情面を扱う感情知性（情動知能）の活用が求められるにもかかわらず、世話人自身が感情的な葛藤を処理する場や機会は少なく、疲弊しバーンアウトしている可能性が挙げられる。そこで本研究では、利用者への地域生活支援の安定と継続に寄与を目指し、精神障害者向けGHの職員の感情労働の実態と感情知性を明らかにした上で、職場定着や離職との関係を明確にし、資質向上につなげる研修プログラムの開発に向けた調査を行うことを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 調査対象 首都圏に所在するおもに精神障害者を利用対象としたGHの職員120名
- 2) 調査期間 平成28年10月18日～平成29年2月22日
- 3) 調査道具 以下2つの質問紙調査を行った

(1) 情動知能尺度(以下, EQS)

自己対応, 対人対応, 状況対応の3領域から構成され, それぞれに3つの対応因子がある。自己対応は自己の心の働きについて知り, 行動を支え, 効果的な行動をとる能力とされており, 信頼性と妥当性が確認されている¹⁾。

(2) 感情労働尺度(以下, ELIN)

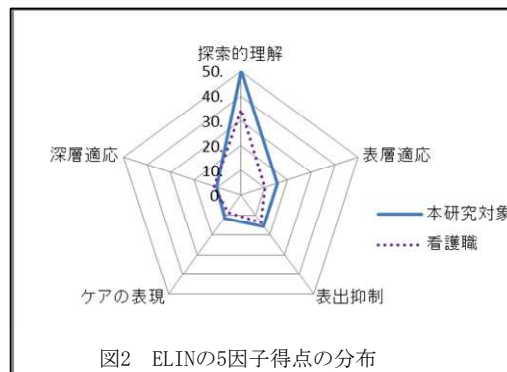
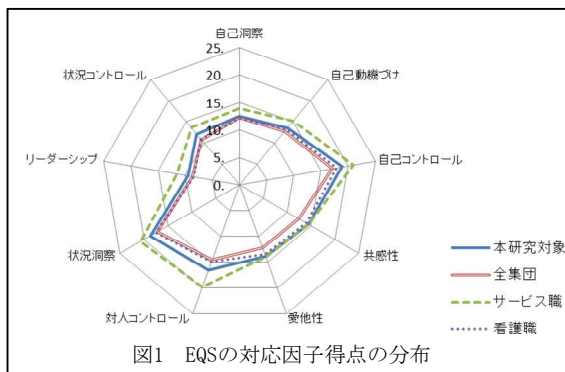
探索的理解, 表層適応, 表出抑制, ケアの表現, 深層適応の5因子から構成される26項目の尺度であり, 信頼性と妥当性が確認されている²⁾。

調査実施に際しては, 研究責任者より施設に対して, 本研究の目的・意義を記した説明書を配布し, さらに口頭で説明した上で了承を得られた職員による同意書への署名をもって同意を得た。なお, 上記の2つの質問紙調査に要する時間は, 説明も含め1回につき約30分程度であった。

3. 研究結果

EQSの3領域における9つの対応因子得点は, 先行研究¹⁾³⁾の結果の平均値と比較すれば高値の傾向が見られたが, 有意差は認められなかった(図1)。

ELINの5因子における得点は, 先行研究³⁾の結果の平均値と比較すれば高値の傾向が見られたが, 有意差は認められなかった(図2)。



ELINの5因子における得点を, 施設形態(滞在型, 通過型)別に比較したところ, III表出抑制の因子得点において有意差が認められた(表1)。

表1 ELIN得点の比較 n=119

| ELIN 因子 | I 探索的理解 | II 表層適応 | III 表出抑制 | IV ケアの表現 | V 深層適応 |
|------------|-----------|----------|----------|----------|----------|
| 研究対象 | 50.2±11.2 | 15.4±3.6 | 15.8±3.2 | 11.4±2.1 | 10.3±2.3 |
| 通過型 (n=36) | 50.2± 7.8 | 15.1±3.7 | 15.1±2.8 | 11.9±1.6 | 10.7±1.8 |
| 滞在型 (n=83) | 50.2±12.4 | 15.6±3.6 | 16.1±3.4 | 11.1±2.2 | 10.1±2.5 |

Mann-WhitneyのU検定 *p<0.05

EQS9対応因子とELIN5因子との関連について、施設形態別に比較するためSpearmanの順位相関係数を求めた。結果、通過型において、EQS対応因子「リーダーシップ」とELIN因子の「I 探索的理解」に正の相関が認められ ($r=0.50, p<0.01$)、同じく「i状況コントロール」と「I 探索的理解」に正の相関が認められた ($r=0.46, p<0.01$) (表2)。滞在型においては、EQS対応因子「a自己洞察」とELIN因子の「III深層適応」に正の相関が認められた ($r=0.43, p<0.01$) (表3)。

表2 情動知能と感情労働の関連 (通過型) n=36

| 情動知能 | 感情労働 | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 因子 IV | 因子 V |
|--------|----------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | | 探索的理解 | 表層適応 | 表出抑制 | ケアの表現 | 深層適応 |
| 状況対応領域 | | | | | | |
| 対応因子 g | 状況洞察 | 0.250 | -0.234 | -0.114 | -0.233 | -.329* |
| 対応因子 h | リーダーシップ | .497** | -0.320 | -0.228 | -0.179 | -0.261 |
| 対応因子 i | 状況コントロール | .456** | -0.263 | -0.018 | -0.038 | -0.155 |

表3 情動知能と感情労働の関連 (滞在型) n=83

| 情動知能 | 感情労働 | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 因子 IV | 因子 V |
|--------|----------|--------|-------|--------|--------|--------|
| | | 探索的理解 | 表層適応 | 表出抑制 | ケアの表現 | 深層適応 |
| 自己対応領域 | | | | | | |
| 対応因子 a | 自己洞察 | .274* | 0.215 | .288** | .339** | .425** |
| 対応因子 b | 自己動機づけ | .260* | 0.105 | .373** | .260* | .335** |
| 対応因子 c | 自己コントロール | .296** | .254* | .242* | .221* | .278* |

Spearman の順位相関係数 **p<0.01, *p<0.05

4. 考察(結論)

EQSにおいて他職種に比して得点が高く、施設職員の感情知能が高い可能性がうかがえる。しかし、ELINにおいて看護職との比較を見ると²⁾、業務における感情労働としての側面も強く、利用者との感情面での負荷がより高い可能性が伺われた。

また、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律(障害者総合支援法)の規定ではGHの職員に資格要件はない。しかし、東京都では「通過型GH」という独自事業を展開しており、規定においては「精神保健福祉士又は社会福祉士の資格を有している者」と定められており、作業療法士や看護師なども相応の経験があれば記載の2職種の代替として認められている。本研究の対象は、東京、千葉、茨城の3都県の子どもの精神障害者向けグループホームの施設職員を対象としており、この施設基準違いによる、配置された職員の教育水準や教育背景、資格職へのアイデンティティやなどが結果に反映した可能性が示唆された。

以上の結果から、今後さらなる対象層の特性の差異と感情知能との関連を調査し、能力に応じて研修プログラムを立案する必要があることが示唆された。

5. 成果の発表(学会・論文等, 予定を含む)

日本精神障害者リハビリテーション学会第25回久留米大会にて報告する予定である。

6. 参考文献

- 1) 島井哲志：情動知能尺度 (EQS) の構成概念妥当性と再テスト信頼性の検討, 行動医学研究8(1), pp. 38-44, 2001
- 2) 片山由加里：看護師の感情労働測定尺度の開発, 日本看護科学会誌25(2), pp. 20-27, 2005
- 3) 片山由加里：看護師の感情と認識が感情労働に及ぼす影響, 日本看護福祉学会誌11(2), pp. 163-173, 2006
- 4) 三上勇氣：精神科看護者の感情労働と抑うつ、経験年数との関連および感情的知能、不合理な信念の影響, 日本看護医療学雑誌12(2), pp. 14-25, 2010